

## 「ノコギリアン文庫フェア」開催にあたって

ノコギリアン

一宮で生まれ、二十代半ばに故郷を出ました。  
そして、四半世紀のち、再び、一宮と関わりを持つようになりました。  
そのきっかけは、全国紙に掲載された一枚の「のこぎり屋根のコウバ」の写真でした。  
それは、故郷の原風景でした。  
いま想えば、ノスタルジーだったかもしれません。  
それから十年後、「のこぎり二」に出会い、大きな衝撃を受けました。  
のこぎり屋根に抱いていた郷愁は、「期待」へと変わりました。

その後、期待は、「可能性」へと膨らんでいきました。  
創造性に満ちた「ウツホ（空洞）」の空間。そして、ここで出会う人たち。  
また、自分なりに、故郷の成り立ちから、現在に至る地域の変貌を探る中で、この尾張西部に特有の「のこぎり屋根のコウバ」の残る風景に、遠い過去から現在に至るまで、ずっと一貫してこの地域をつくってきた何かが潜んでおり、ここから未来の「可能性」が見えてくるのではないかと思うようになりました。

そして、先行き見えないまま書き始めた手記が、「断章“ノコギリヤネのある風景”」です。  
この手記は現在進行中ですが、あらためて実感したことの一つが、一宮を“ガチャ万”という戦後の一時の風潮で象徴しがちであることの自虐性と地域の閉鎖性です。  
それを、“ガチャ万の呪縛”と形容しました。  
尾張という地域は、もともと多様性のある独自の風土を形成してきたのです。ガチャ万の呪縛から解放されることで、もっと面白い故郷となるのです。使われなくなってきたものを含む“ノコギリヤネ”を“開く”ことで、未来の可能性が見えてくるのです。

今回、「のこぎり二」の一角、「二坪の眼」（主宰・青木俊克氏）をお借りして、「ノコギリアン文庫フェア」を開催させていただくことになりました。  
主宰者によれば、「二坪の眼」は“思考実験の場”です。「断章“ノコギリヤネのある風景”」も“思考実験”の段階です。そして、このフェアは、いま、この場で邂逅する“あなた”との「対話」という“思考実験”に他なりません。  
始まりは離れていても、いつか、どこかで交錯する“無限遠点”を見据えながら。

### ●ノコギリアン（今枝忠彦）

1957年（昭和32年）生まれ。一宮市今伊勢町出身。神奈川県藤沢市在住。都市計画・まちづくりコンサルタント。経済産業省の派遣で、中心市街地活性化診断・助言事業検討委員として一宮市を担当（2007年）。